中央アジアのチュルク諸語におけるモダリティ対照の試み

The Preliminary Comparative Study of Modality in the Turkic Languages of Central Asia (TLCA)

日 髙　晋 介
HIDAKA Shinsuke

This is a preliminary study on modality in the Turkic languages of Central Asia (TLCA). TLCA includes the following five languages: Turkmen in the southwestern branch, Kyrghyz and Kazakh in the northwestern branch, and Uzbek and Uyghur in the southeastern branch. This study attempted to clarify a point of similarity or difference after comparing the modality in TLCA using data from the SPECIAL ISSUE of "Modality" in the Journal of the Institute of Language Research, No. 16. Consequently, our analysis found one similarity and some differences in TLCA. One similarity is that TLCA expresses the wish with a verbal noun + a verb *kel/gel-* "come." Some differences are as follows. Turkmen has the necessary form *-mAlI*, the special constructions of the auxiliary verbs *bil-* "to know" and *bol-* "to be." Kyrghyz has a unique particle *go*, and some modal elements follow the finite verb. The conditional form *V-sa* + *bol-* "be" in Uyghur has broader uses. Uzbek and Kazakh have more similarities than other TLCA. In addition, we have identified some assumptions for each TCLA. Turkmen may be a Turkic language belonging not only to the southeastern branch but shares features in other TCLA. The linguistic contact between Uzbek and Kazakh may cause similarities.

キーワード：中央アジア、チュルク諸語、モダリティ
Keywords: Central Asia, Turkic languages, Modality

1.　はじめに

本稿では、同一の調査票を用いて引き出されたデータ (主に『語学研究所論集』第 16 号 (2011) のテーマ企画「特集 モダリティ」に所収の各言語のデータと、第 16 号以降に出版された各言語の補遺データ) と、筆者の聞き出し調査から得られたデータを用いて、中央アジアのチュルク諸語である五つの言語 (トルクメン語・キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語) を同一平面上で比較対照して、各言語間にある類似点・相違点を

描き出すとともに、これらの言語のモダリティに関する研究を行う際に着眼すべき点を顕在化させることを目的とする。

まず、トルクメン語・キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語の概要を述べる。地理的状況・系統的分類・話者数、本稿における各言語のデータの出典とデータを扱う際に留意すべき点について、それぞれ述べる。

図 1 に本稿で扱う言語が話される中央アジアの概略図を示す。本稿で扱う言語が主に話されている国名・地域名に四角囲みを付す[1]。

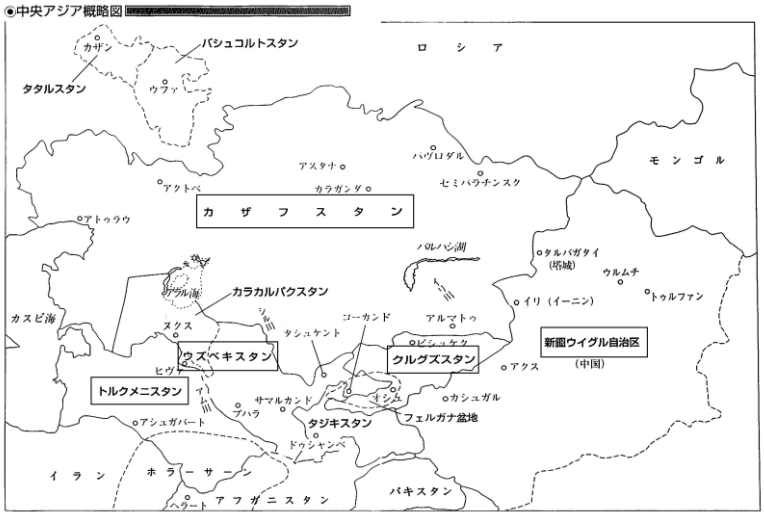

図 1: 中央アジアの概略図 (宇山編 2010: 2 に四角囲み付す)

中央アジアに位置するチュルク諸語は、Johanson (1998: 82-83, 2021: 21-23) によるチュルク諸語の系統分類にしたがうと、南西 (オグズ) 語群・北西 (キプチャク) 語群・南東 (カルルク) 語群のいずれかに分類される。以下に、系統分類の項目ごとにそれぞれの言語を、主に話されている国名あるいは地域名・話者数[2]とともに挙げる。

[1] 図 1 では、タタルスタン、バシュコルトスタン、モンゴル東部、タジキスタン、ホラーサーン地方も中央アジアに含まれるが、これらの地域で話されるチュルク諸語は考察の対象とせず、より地理的にそれぞれが密接している、トルクメン語・キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語を「中央アジアのチュルク諸語」とする。ただし、タタルスタンで主に話されるタタール語、バシュコルトスタンで主に話されるバシキール語は、カザフ語・キルギス語と同じ北西 (キプチャク) 語群に属し、後述する -GAn-Turkic (Schönig 1999: 72) にも属するため、本稿で扱う言語と共通する特徴を持つ可能性が高いことを指摘しておく。

[2] 話者数は、Ethnologue: Languages of the World (https://www.ethnologue.com/) の各言語のページの Total users in all countries を参照している。

南西 (オグズ) 語群：
　Trk. = トルクメン語 (トルクメニスタン; 約 666 万)
北西 (キプチャク) 語群：
　Kr. = キルギス語 (クルグズスタン (キルギス); 約 513 万)
　Ka. = カザフ語 (カザフスタン; 約 1270 万)
南東 (カルルク) 語群：
　Uz. = ウズベク語 (ウズベキスタン; 約 2800 万人)
　Uy. = 現代ウイグル語 (新疆ウイグル自治区; 約 1041 万)

チュルク諸語の古典的な分類基準 (Samojlovič 1922: 15) を参照すると、本稿で対象にする中央アジアの五言語は、「足」、「山」、語末の q/ɣ が次のような対応を見せることで三つの語群に分けられる。表 1 は、Samojlovič (1922) の分類を庄垣内 (2002) が簡略化した表のうち、中央アジアのチュルク諸語が属する語群 (南西語群、北西語群、南東語群) が記載されている部分を筆者が抜粋したものである。表中の音形表記は庄垣内 (2002: 8) にしたがっている。

表 1: 中央アジアのチュルク諸語に関する伝統的な系統的分類

	南西語群 Trk. etc.	北西語群 Kr., Ka. etc.	南東語群 Uz., Uy
「足」	ayaq		
「山」	daɣ	taw/tu/to:	taɣ
(語末 q/ɣ の対応)	-ï		-ïq/-ïx

ただし、後述するように、異なる語群間にも共通する特徴があることがすでに指摘されている (cf. Schönig 1999)。

本稿のデータは、『語学研究所論集』第 16 号 (2011) のテーマ企画「特集 モダリティ」に所収の各言語のデータと、第 16 号以降に出版された各言語の補遺データによるところが大きい。各言語の表記・グロスは、次に挙げる各文献に基本的にしたがっている[3]。トルクメン語については風間 (2022) に、キルギス語についてはアクマタリエワ (2011) に、ウズベク語については日髙 (2013)、現代ウイグル語については風間伸次郎氏・新田志穂氏提供のデータ[4]に、それぞれしたがっている。カザフ語のデータは、筆者自身が風間

[3] 文献に記載された用例には、グロスの間違いや現時点での筆者の分析とは合致しないグロスが散見される。本稿では、筆者が訂正したグロスを示す。
[4] 現代ウイグル語のデータは、既に刊行された語研論集に沿って、風間伸次郎氏が例文を収集しグ

(2011) に挙げられた調査例文を用いて母語話者から聞き取り調査を行ってグロスを振ったものである。カザフ語のデータは Muhanmedowa (2016: xvii) にしたがってラテン文字で表記する。ただし、これらの調査データは、日本語からの調査文一文を各言語に翻訳した例から得られたものであり、被調査者の日本語文の解釈によって様々なバリエーションが出現しうること、『語学研究所論集』に挙げられた例文以外の形式でも当該のモダリティを表す可能性があることに留意する必要がある。今後は、筆者を含めた各言語に精通した専門家とともに適切な状況を設定したうえで、被調査者の解釈に幅が出ないように調査を行う必要がある。そのような問題点に留意したうえで、本稿では、中央アジアのチュルク諸語のモダリティ対照の第一歩として、『語学研究所論集』に所収されているデータの対照を試みる。

次に、問題の所在について述べる。上記で述べたように、中央アジアの五つのチュルク諸語は、系統的には、南西 (オグズ) 語群・北西 (キプチャク) 語群・南東 (カルルク) 語群のいずれかに分類される。ただし、系統的な分類を超えた共通の特徴を持つことも指摘されている。Schönig (1999: 72) は、The interactive areas (お互いに影響を与え合う地域) の一つとして、-GAn-turkic というグループを立てている[5]。このグループには、北西語群・南東語群に属する言語、および南シベリアのチュルク諸語とハラジ語が含まれ、南西語群に属するトルクメン語も -GAn-turkic のいくつかの特徴を持つとされている。Schönig (1999: 72) は、-GAn-turkic の定義づけについて明言していないが、-GAn-turkic に属する言語では、定形動詞形と連体修飾形の *-miš* の代わりに、*-GAn*[6]が用いられる、と述べており、この特徴を以て、-GAn-turkic というグループを立てる根拠としているようである。確かに、「私が昨日買ってきた本」を表す文の連体修飾述語 (下記例中の太字部分; 太字は筆者付す) を比べると、*-GAn* をもとにした形式を持つことがわかる。Schönig (1997: 265) によれば、トルクメン語の *-An* は、通時的には *-GAn* が変化したものである。

ロス付けを行い、それらの例文とグロスを新田志穂氏がチェックしたものである。これらのデータは、2023 年 3 月末刊行予定の語研論集 27 号に「現代ウイグル語: 特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「連用修飾複文」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造と名詞述語文」「所有・存在表現」「否定、形容詞と連体修飾複文」「情報構造の諸要素」」という題で投稿されているが、本稿の最終提出時点で査読中であった。そのため、本稿の文献一覧には書誌情報が掲載できなかったことに注意されたい。

[5] Schönig (1999: 73) では、二人称代名詞のポライトネスの観点から、キプチャク (北西) 語群と南東語群の言語群 (キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語) を Central Asian Turkic としてまとめている。本稿は、地理的な観点からトルクメン語・キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語を「中央アジアのチュルク諸語」として、それらの言語の間に類似があるか、類似があるとしたら何が原因で類似を引き起こすのか考察する試みであることに注意されたい。

[6] 子音調和・母音調和による代表形が大文字によって示されている。本稿における接尾辞表記もこれに倣う。

(1) 「私が昨日買ってきた本」

a. トルクメン語 (南西語群; 風間 2022: 480):

Men *düýn* *[sat-yn* ***al]-an*** *kitab-ym*

I yesterday buy[trade-CVB.SIM take]-PTCP.PFV book-1SG

b. キルギス語 (北西語群; 風間・アクマタリエワ 2022: 668):

Kečěě *satïp* ***al-gan*** *kiteb-im*

yesterday [sell-CVB.PFV take]buy-PTCP.PFV book-1SG.POSS

c. カザフ語 (筆者による作例、母語話者確認済):

keše *sat-ïp* ***al-ɣan*** *kitab-ïm*

yesterday sell-CVB.SEQ take-PTCP.PAST book-1SG.POSS

d. ウズベク語 (南東語群; 風間・日髙 2022: 714):

(Men) *kecha* *sot-ib* *ol-ib* ***kel-gan*** *kitob*

I yesterday buy[sell-CVB.PFV take]-CVB.PFV come-PTCP.PFV book

e. 現代ウイグル語 (南東語群; 風間・新田によるデータ):

Men *tünügün* ***al-ğan*** *kitab*

I yesterday take-PTCP.PF book

トルコ語 (南西語群) の同じ意味を表す例文を観察すると、連体修飾形に *-GAn* ではなく、*-DIK* が用いられていることがわかる。

(2) トルコ語 (南西語群; 奥 2020: 198)

Benim *dün* ***al-dığ-ım*** *kitap*

私の 昨日 買う-PTCP-POSS.1SG 本

「私が昨日買ってきた本」

トルコ語では、連体修飾述語として、トルクメン語に類似した形式の *-(y)An* も用いられる。関係節の中に主語がある場合は *-DIK* が用いられ、関係節の中に主語がない場合は *-(y)An* が用いられる (奥 2020: 198)。ただし、トルクメン語・キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語では、関係節内に主語があるかどうかに関わらず、連体節述語の形式として広く *-GAn* が用いられる。

Schönig (1999: 72) は、-GAn-turkic に属する言語は、述語形式 *-GAn* 以外にも、以下のような特徴を共有するという。

- **-A/p yat-a tur-* [-CVB lie-CVB stand-] に由来した現在進行形を持つ。

- -GAn-turkic に属する多くの言語間において、補助動詞構造が同一のパターンに従う。
- -GAn-turkic に属する言語では、Old Turkic 由来の *ï:d-* かその派生形式の *ï:du ber-* が「送る」を意味する。
- *täŋri*「神; 天国」の口蓋化した同源の語を持つ。

中央アジアのチュルク諸語にも上記の特徴が見られるが、モダリティの点では類似はないのだろうか。本稿では、同一の調査票を用いて引き出されたデータを用いて、モダリティという観点から、中央アジアのチュルク諸語である五つの言語を同一平面上で比較対照することで、従来の系統分類とのずれがあるかどうかを探る。

2. 調査方法と結果

本稿のデータは、『語学研究所論集』第 16 号 (2011) のテーマ企画「特集 モダリティ」に所収の各言語のデータ、第 16 号以降に出版された各言語の補遺データ、筆者による聞き取り調査で収集したデータによる。表 2 にそれらのデータを対照した結果を示す。

本稿では、各言語のデータのうち、モダリティを直接的に表す箇所のみを取り扱う。したがって、下記の例文は考察の対象外とする。

反実仮想：

「もしお金があったら、あの車を買うんだけれどなあ。」

「もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。」

「もっと早く来ればよかった。」

tag question：

「これを作った (料理した) のは、お母さんだよね？いいえ、私が作ったのよ。」

脱従属節化：「あなたも一緒に行ったら (どうですか) ？」

反語：「そんなことオレが知るか！」

表の見方は、次の通りである。左二列における、モダリティの名称と例文は、風間 (2011) からの引用である。例文はレイアウトの都合上、一部省略している箇所がある。二行目の言語に関する略語は次のように対応している：Trk. = トルクメン語、Kr. = キルギス語、Ka. = カザフ語、Uz. = ウズベク語、Uy. = 現代ウイグル語。三行目以降の各言語の形式に関する略語は次のように対応している：屈＝屈折形式、分＝分析的形式、補＝補助動詞、語＝語・接語、他＝左記以外の手段。分* は分析的形式が 2 パターンあることを表している。補助動詞と屈折形式はそれら自体がモダリティを表す場合、分析的形式は、形動詞形・動名詞形・条件形など定動詞以外の要素に、語・接語が続くことでモダリティを表

す場合、語・接語は、文を終止する言い切りの形 (述語人称語尾が付いた述語、Uz. *bor*「ある」など) の後に語あるいは接語がモダリティを表す場合を、それぞれ指す。

表 2: モダリティを表す手段一覧

		例文	南西	北西		南東	
			Trk.	**Kr.**	**Ka.**	**Uz.**	**Uy.**
拘束的	許可	もう帰ってもいいですよ。	補	分	分	分	分
	禁止	それを食べてはいけない。	補	分	分	分*	分
		それを食べるな。	屈	屈	屈	屈	屈
	義務	もう帰らなければならない。	屈	分	分	分	分
	推奨	傘を持って出かけたほうがいいよ。	分	屈	屈	分	屈
	評価的義務	歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ／ものだ。	屈	分	分	分*	分*
欲求的	希望	私は何か食べたい。	分	分	分	分	分
	希望 制御不能	明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。	他	分	分	分	分
	希望 3 人称	(あの人は) 街へ行きたがっている。	分	分	分	分	分
	意志	私が持ちましょう。	屈	屈	屈	屈	屈
	勧誘	一緒に昼ごはんを食べましょう。	屈	屈	屈	屈	屈
	勧誘 意向不明	一緒に昼ごはんを食べませんか？	屈	屈	屈	屈	屈
	1 人称 命令	僕にもそれを少し飲ませろ。	屈	屈	屈／分	屈／分	分
	3 人称 命令	これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。	屈	屈	屈	屈	屈
	遠未来 命令	そのテーブルの上の菓子を後で食べなさい。	屈	屈	屈	屈	屈
	命令	すぐにそれを持って来なさい。	屈	屈	屈	屈	屈
	懇願	そのペンを貸していただけませんか？	屈	屈	屈	屈	分
動的	能力 可能	あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。	補	補	補	補	補
	状況 可能	明かりが暗くて、ここに何て書いてあるのか、読めない。	他	補	補	補	補

認識的	確信	彼らはもう着いているはずだ。／ もう着いたに違いない。	分	分	分	分	補
	推量	(あの人は) 今日はたぶん来ないだろう。	他	分	分	分	分
	疑念	彼らがまだ来ないなんて、 途中で車が壊れたんじゃないか。	屈	分	分	分	分
	可能性	さあ、(昼間だからあの人は家に) いる かもしれないし、いないかもしれない。	補	分	分	分	分
証拠性	視覚／ 聴覚以外	どうもあなたは熱があるようだ。	分	語	語	分	分
	伝聞	(天気予報によれば) 明日は雨が降る そうだ。	屈	語	分／他	他	分

3. 分析

3.1 節にて、各言語におけるモダリティを表す手段の分布の偏りについて、3.2 節にて、南西語群以外で大きな割合を占める手段である分析的形式について、最後に、3.3 節にて、可能を表す補助動詞について、それぞれ分析する。

3.1. モダリティを表す手段

表 3 に、中央アジアのチュルク諸語がモダリティを表す際に取る手段の分布とそれらの割合を一覧にする。セル内の数字は各手段が用いられた数、その右隣の括弧付きの数字は各言語の全例文数に対して当該手段が用いられた数の割合を、それぞれ表す[7]。太字は、同行の他言語における割合よりも高い割合に付す (分析的形式は除く)。トルクメン語以外の四言語では、いずれも分析的形式の割合が高い。次節で、分析的形式の詳細を述べる。

表 3: モダリティを表す手段の分布と割合

	南西		北西		南東			
	Trk.		**Kr.**		**Ka.**	**Uz.**		**Uy.**
屈折形式	14	(53.8)	10	(40.0)	10 (37.0)	9	(32.1)	8 (30.8)
分析的形式	5	(19.2)	11	(44.0)	13 (48.1)	16	(57.1)	15 (57.7)
補助動詞	4	(15.4)	2	(8.0)	2 (7.4)	2	(7.1)	3 (11.5)
語・接語	0	(0.0)	2	(8.0)	1 (3.7)	0	(0.0)	0 (0.0)
その他	3	(11.5)	0	(0.0)	1 (3.7)	1	(3.6)	0 (0.0)
計	26	(100.0)	25	(100.0)	27 (100.0)	28	(100.0)	26 (100.0)

[7] 各言語で各手段の割合を足すと、100 に満たず 99.9 になる場合がある。これは、各割合の小数第 2 位を四捨五入していることによる。

表 3 から読み取れるのは、トルクメン語 (南西語群) と、キルギス語・カザフ語・ウズベク語・現代ウイグル語 (北西語群・南東語群) との間に大きな差があることと、キルギス語とカザフ語 (北西語群) では語あるいは接語でモダリティを表す手段があることである。下記では、それぞれの点について例文を挙げながら分析する。各言語のデータは、次に挙げる各文献から引用している: トルクメン語データは風間 (2022) 、キルギス語データはアクマタリエワ (2011) 、ウズベク語データは日髙 (2013)、現代ウイグル語データは風間伸次郎氏・新田志穂氏提供のデータ (詳細は脚注 4 を参照されたい) から、それぞれ引用している。カザフ語のデータは、筆者自身が風間 (2011) に挙げられた調査例文を用いて母語話者から聞き取り調査を行ってグロスを振ったものである。これ以降、例文に出典は付さない。日本語の調査文中には括弧が付されている箇所があるが、話者によっては括弧付きの部分を訳していない場合があることに注意されたい。

まず、トルクメン語の屈折形式、補助動詞、その他の手段に着目する。トルクメン語は、屈折形式として義務形 *-mAlI* を持ち、*-mAlI* が「義務」(3)・「評価的義務」(4) のみならず「疑念」(5) にも用いられていることが屈折形式の割合を高くしていると考えられる。表 2 を参照するに、他語群の言語では、「義務」・「評価的義務」・「疑念」は、屈折的形式ではなく分析的形式で表される。

(3) 拘束的・義務「(遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。」

Trk. *Biz* *öý-e* ***git-meli***.
we house-DAT go-OBLG

(4) 拘束的・評価的義務「歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ／ものだ。」

Trk. *Gartaş-an* *wagt-yň* *öz* *çaga-la-ň* *saňa* *näme*
get.along/old-PTCP.PFV time-2SG oneself child-PL-2SG you.DAT what
diý-ýän-in-e *gulag* ***as-maly***.
say-PTCP.PFV-3.POSS-DAT ear hang-OBLG

(5) 認識的・疑念「彼らがまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」

Trk. *O-lar* *entek* *gel-enok,* *ýol-da* *maşyn* *döw-ül-en* ***bol-maly***.
that-PL yet come-NEG.PRS way-LOC car break-pass-PTCP.PFV be-OBLG

Rentzsch (2015: 139) は、*-mAlI* は、トルクメン語と同じく南西語群に属するトルコ語やアゼルバイジャン語にも存在するが、トルクメン語の *-mAlI* は、それ自体に何も付されずに

用いられるか、アスペクトやムードを表す接辞で屈折した *bol-* を後続させることで用いられる[8]、と述べている。上記の例では、何も要素が付されていない。

次に、補助動詞について述べる。トルクメン語では、副動詞 *-(I)p* に続けて、補助動詞 *bil-*「知る」と *bol-*「なる」が用いられる。*-(I)p bil-* は「許可」(6) と「能力可能」(7) で用いられている。ただし、他の語群では *-(I)p bil-* に音的に相当する形式は用いられない (cf. Rentzsch 2015: 93-94)

(6) 拘束的・許可「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

Trk.	*Öý-üňiz-e*	***gid-ip***	***bil-ýä-ňiz.***
	house-2PL-DAT	go-CVB.PFV	know-PRS-2PL

トルクメン語以外の北西語群 (キルギス語・カザフ語) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) では、許可は分析的形式「条件形＋なる」で表される (cf. 3.2.1 節 (13))。

(7) 動的・能力可能
「あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。」

Trk.	*Ol*	*hytaý-ça*	***oka-p***	***bil-ýär.***
	that	chinese-language	read-CVB.PFV	know-PRS

トルクメン語以外の北西語群 (キルギス語・カザフ語) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) でも、補助動詞で表されるが副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-*あるいは *al-*「取る」で表される (cf. 3.3 節 (27))。

-(I)p bol- (禁止 (8)) は、ウズベク語とカザフ語において対応する音形の補助動詞が存在するが、禁止を表すのではなく、動作主が明示されない環境での可能を表す (Rentzsch 2015: 94)。

(8) 拘束的・禁止「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

Trk.	*Zaýalan-yp=dyr,*	*o-ny*	***iý-ip***	***bol-anok.***
	go.bad-CVB.PFV=COP.ASSERT	that-ACC	eat-CVB.PFV	be-NEG.PRS

トルクメン語以外の北西語群 (キルギス語・カザフ語) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) では、禁止は補助動詞ではなく、様々な分析的形式で表される (cf. 3.2 節の表 4)。

[8] チュバシュ語 *-mAllA* も、トルクメン語の *-mAlI* と同じ特徴を持つという (Rentzsch 2015: 139)。

中央アジアの各言語における *-(I)p bol-* 相当形式が表す意味領域について調査すれば、各言語における *bol-*「なる」の文法化の実態が明らかにできるかもしれない。

その他の手段として、動詞語幹に*-Aý* (否定形 *-mAý*) が付き、その後に条件形 *-sA* が続く場合が見られる[9]。*-Aý* は動詞語幹に付されることで、動作の要求あるいは許可が表される (Clark 1998: 297)。本稿で参照するデータでは、3 人称の制御不可能な希望を表す場合 (9) は、動詞語幹*-Aý-sA* の後に過去を表す接語が続いており、推量を表す場合 (10) は、否定形 *-mAý* と条件形 *-sA* の間にさらに否定接辞がある[10]。

(9) 欲求的・希望 (3 人称 制御不可能)
「明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。」

Trk.	*Ertir*	*howa*	*gowy*	***bol-aý-sa=dy***.
	tomorrow	weather	well	be-PFV-CVB.COND=COP.PST

(10) 認識的・推量「(あの人は) 今日はたぶん来ないだろう。」

Trk.	*Ol*	*ertir*	***gel-mäý-me-se***.
	that	probably	come-NEG-NEG-CVB.COND

つまり、(9) と (10) は、動詞語幹*-Aý* [否定形 *-mAý*]*-sA* が要求・許可を表すのみならず、三人称主体の制御不可能な希望あるいは推量にも使われうる、ということを示唆している。今後、トルクメン語における「動詞語幹*-Aý* [否定形 *-mAý*]*-sA*」の意味と用法についてさらに調査を行う必要がある。

次に、北西語群 (キルギス語とカザフ語) でモダリティを表す際に用いられる語・接語について述べる。キルギス語とカザフ語では、証拠性を表す場合に語・接語が用いられている。(11) では、キルギス語では *go*、カザフ語では、*siyaqtï*「～ような／～ように」がそれぞれ用いられている。

---

[9] 動的・状況可能「暗くて文字が読めない」もその他の手段で表現される。トルクメン語では「読む」を意味する動詞が用いられずに「文字が見えない」と翻訳され、他方、他の言語では「読む」を意味する動詞が用いられている。したがって、トルクメン語では状況可能を直接的に表せない可能性があり、この点についてさらに調査を進める必要があろう。

[10] (9) では *-aý* のグロスが PFV とされ、(10) では *-mäý* のグロスが NEG とされているが、すでに述べたように、*-Aý* (否定形 *-mAý*) は動作の要求あるいは許可を表す。

(11) 証拠性・視覚／聴覚以外の感覚による判断
「(額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。」

Kr. *Senin* *temperatura-ŋ* *bar* ***go***.
君(GEN) 熱-2SG:POSS ある MOD

Ka. *ïstïɣ-ïŋ* *bar* ***siyaqtï***.
heat-2SG.POSS existence like

アクマタリエワ (2011: 207) によれば、キルギス語の *go* は推測を表すという。カザフ語には、キルギス語の *go* と音的に類似した小詞 *ɣoy* がある。ただし、カザフ語の *ɣoy* は、情報構造に関わる要素 (対比 (contrastivity) あるいは旧情報 (givenness) を表す) であると指摘されている (Christopher 2020: 106)。トルクメン語では *ýaly*「ように／ような」、ウイグル語では *-dek*「ように／ような」が用いられるが、ウズベク語では、*-ga o'xsha-y=di*「与格＋似る」が用いられる。これについては、3.2.4 節で再度述べる。

(12) では、*eken* が伝聞を表すために用いられている。アクマタリエワ (2011: 207) によれば、*eken* は「誰かからきいたことを誰かに伝える時に用いられる。すなわち、伝聞を表す」という。*eken* に音的に相当する形式は、ウズベク語では *ekan* である。ただし、ウズベク語では *ekan* は、(12) のように定動詞のあとには現れない (これについては、4 節で再度述べる)。

(12) 証拠性・伝聞「(天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ」

Kr. *Ertesŋ* *jaan* *jaa-y-t* ***eken***.
明日 雨 降る-PRES-3 MOD

他方、トルクメン語では、不定未来形 *-Ar* が用いられ、カザフ語では、「降る」の現在形の後に「言う」を続けるか「雨になる」という表現が用いられている。ウズベク語では、「天気予報によれば」という句と動詞現在形が用いられている。

3.2. 分析的形式

表 4 に、分析的形式がどのような要素から成り立っているかについて一覧にする。この表には、表 2 において、いずれかの言語で分析的形式が用いられた行のみを記載している。分析的形式は、基本的には「動詞形式＋語彙的あるいは文法的形式」から成る[11]。以降の

[11] 動詞形式が用いれられない例は、下記の a. に挙げるように、ウズベク語において、*bor*「ある」に与格-*ga* が直接付いて、*o'xsha-y=di*「似ている」が続く用例である。この用例は、証拠性・視覚／聴

小節で取り上げる形式は、セル内上部に当該のモダリティを表す音形を記し、その音形の下に「動詞形式を簡略に示した略号＋語彙的あるいは文法的形式」で示す。略号の凡例を次に示す：動＝動名詞、形＝形動詞、条＝条件形。＋の後に語彙的意味を持つ語が位置する場合は語彙的意味を、文法的意味を持つ語が位置する場合は音形を、それぞれ記す。以降で取り上げない形式は、音形は記さず「動詞形式を簡略に示した略号＋語彙的あるいは文法的形式」のみ示す。

以下小節で言及する箇所には、セル塗りつぶしなどの装飾を施している。表中で語群を超えて共通して見られる形式のセルは灰色塗りつぶし、セル内の文字を太字で記す。現代ウイグル語の「条件形＋なる」は、白抜き文字で記す。

表 4: 分析的形式の詳細一覧

		南西	北西		南東	
		Trk.	**Kr.**	**Ka.**	**Uz.**	**Uy.**
拘束的	許可		**-se-ŋ bol-o-t.** **条+なる**	**-se-ŋ bol-a=dï.** **条+なる**	**-sa-ng ham bo‘l-a-di.** **条+なる**	**-si-ŋiz bol-idu** **条+なる**
	禁止		形＋なる	動＋なる	動＋必要だ 動＋可能だ	-si-ŋiz bol-ma-ydu 条＋なる
	義務		**-iš-ibiz kerek** **動＋必要だ**	**-uw-ïmïz kerek** **動＋必要だ**	**-ish-imiz kerak** **動＋必要だ**	-mi-se-k bol-ma-ydu. 条＋なる
	推奨	条＋なる			形＋よい	
	評価的義務		**-uu kerek** **動＋必要だ**	**-w kerek** **動＋必要だ**	**-ish kerak** **動＋必要だ**	-mi-sa bol-ma-ydu 条＋なる
					形＋明白な	形＋話
欲求的	希望	**-es-im gel-ýär.** **動＋来る**	**-gi-m kel-ip jat-a-t.** **動＋来る**	**-gi-m kel-ip tur.** **動＋来る**	**-gi-m kel-yap-ti** **動＋来る**	**-gü-m kel-di.** **動＋来る**
	希望制御不能		条＋eken	条＋よい	条＋edi	bol-sa bol-atti. 条＋なる
				条＋ɣoy		

覚以外の感覚による判断を表す。

a. 証拠性・視覚／聴覚以外の感覚による判断

「(額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。」

Uz. *Isitma-ngiz* *bor-ga* *o‘xsha-y=di.*
fever-2PL.POSS exist-DAT be.like-NPST=3

	希望 3 人称	**-es-i gel-ýär.** **動＋来る**	**-gï-sï kel-ip jat-a-t.** **動＋来る**	**-ɣï-sï kel-ip tur** **動＋来る**	**-gi-si kel-yap-ti.** **動＋来る**	動＋ある
	1 人称 命令			動＋与える	条＋よい	
	懇願					-si-ŋiz bol-a=m-du? 条＋なる
認識的	確信	形＋=dyr	**-uš kerek.** **動＋必要だ**	**-uw kerek** **動＋必要だ**	**-ish-i kerak.** **動＋必要だ**	
	推量		動＋必要だ	形＋ような	条＋必要だ	
	疑念		**-sa kerek.** **条＋必要だ**	**-sa-ø kerek** **条＋必要だ**	**-sa-ø kerak** **条＋必要だ**	形＋話
	可能性		動＋必要だ	**-uw-ï mümkin** **動＋可能だ**	**-ish-i ham mumkin** **動＋可能だ**	**-uş-i=mu mumkin** **動＋可能だ**
証拠性	視覚／聴覚以外	-ýa-ň ýaly. 形＋ような			-ga o‘xsha-y=di 与格＋似る	-dek tur-idu. ように＋である
	伝聞			定＋言う		定＋言う

以下では、まず、表中に装飾が施されている箇所について、モダリティの種類で分けて分析を行う。3.2.1 節で拘束的モダリティ、3.2.2 節で欲求的モダリティ、3.2.3 節で認識的モダリティを表す分析的形式について述べる。最後に、3.2.4 節で認識的モダリティを表す形式について述べる。

3.2.1. 拘束的モダリティ

本節では、北西語群 (キルギス語・カザフ語) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) において共通の形式によって表されている「許可」と「義務」・「評価的義務」について述べ、次に、拘束的モダリティを広くカバーする、現代ウイグル語の「条件形＋*bol-*「なる」」について述べる。

「許可」は、北西語群 (キルギス語・カザフ語) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) において「条件形＋*bol-/bo‘l-*「なる」」で表される。

(13) 拘束的・許可「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

Kr. *(Jumuš-uŋ* *büt-sö)* *Ket-e* ***ber-se-ŋ*** ***bol-o-t.***

(仕事-2SG:POSS 終わる-COND) 行く-CVB 与える-COND-2SG なる-PRES-3

Ka. *bol-dï-ø,* *qayt-a* ***ber-se-ŋ*** ***bol-a=dï.***
be-PAST-3 return-CVB.CNT give-COND-2SG become-NPST=3

Uz. *Shu* *ish-ni* *tugat-sa-ng,* ***qayt-sa-ng*** *ham* ***bo'l-a=di.***
that work-ACC finish-COND-2SG return-COND-2SG also become-NPST=3

Uy. *(U* *iş* *tügi-se)* ***ket-si-ŋiz*** ***bol-idu.***
that work finish-CVB.COND go-CVB.COND-2SG.HONOR become-IND.PRS

トルクメン語では、副動詞 *-(I)p* に続いた補助動詞 *bil-*「知る」で表される。詳しくは、(6) を参照されたい。

「義務」(14) あるいは「評価的義務」(15) は、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語 (南西語群) では「動名詞＋*kerek*「必要だ」」で表される。動名詞の音形に着目すると、キルギス語では「義務」で *-(I)š*、「評価的義務」で *-UU~-OO*[12]が用いられ、他方、カザフ語では両者とも *-(U)w*、ウズベク語でも両者とも *-(i)sh* が用いられる。

(14) 拘束的・義務「(遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。」

Kr. *(Keč* *kir-ip* *kal-dï)* *Biz* ***ket-iš-ibiz*** ***kerek.***
(遅い 入る-CVB 残る-PST1) 私たち 行く-VN-1PL.POSS 必要

Ka. biz ***qayt-uw-ïmïz*** ***kerek.***
2PL return-VN-1PL.POSS necessity

Uz. *{Kech* *tush-gan-i* */Kech*
evening fall-PTCP.PAST-3.POSS evening

bo'l-gan-i} *uchun,* *biz* ***qayt-ish-imiz*** ***kerak.***
become-PTCP.PAST-3.POSS because 1PL return-VN-1.PL.POSS necessary

[12] Kirchner (1998: 351) では、前者 *-(I)š* は動作の方法を表し (e.g. *araba ayda-š-ï* [car drive-VN-3.POSS]「車の運転方法」)、後者 *-UU~-OO* は動作動詞を形成するのに用いられる (e.g. *bar-uu* [go-VN]「行くこと」) とされている。ただし、この説明では、「義務」と「評価的義務」との間で異なる音形の動名詞が用いられていることについて説明できない。キルギス語における動名詞の差異については更なる調査が必要である。

(15) 拘束的・評価的義務「歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ／ものだ。」

Kr. *Kartay-gan-da* *bala-nïn* *söz-ü-n* ***ug-uu*** ***kerek.***
衰える-PART-LOC 子供-GEN 言葉-3:POSS-ACC 聞く-VN 必要

Ka. *bala* *ös-ken* *sayïn,* *onïŋ* *ayt-qan-ï-n* ***tïŋda-w*** ***kerek.***
child grow-PTCP.PAST every 3.GEN say-PTCP.PAST-ACC listen-VN necessity

Uz. *osh* *katta* *bo'l-gan-da* *bola-lar-ning* *ayt-gan-i-ni*
age big become-PTCP.PAST-LOC child-PL-GEN say-PTCP.PAST-3.POSS-ACC
qil-ish ***kerak***.
do-VN necessary

他方、トルクメン語では、屈折形式 *-mAlI* が用いられ ((3), (4))、現代ウイグル語では、以下に示すように、「条件形＋なる」が用いられる ((18), (19))。

最後に、現代ウイグル語の「条件形＋なる」は拘束的モダリティの意味を広くカバーすることを指摘する。この形式は、「推奨」以外の拘束的モダリティ (「許可」(16)、「禁止」(17)、「義務」(18)、「評価的義務」(19)) で用いられる。

(16) 拘束的・許可「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

Uy. *(U* *iş* *tügi-se)* ***ket-si-ŋiz*** ***bol-idu.***
that work finish-CVB.COND go-CVB.COND-2SG.HONOR become-IND.PRS

(17) 拘束的・禁止「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない。」

Uy. *(U* *nerse* *buz-ul-up* *qal-uptu,)* ***yé-si-ŋiz*** ***bol-ma-ydu***
that thing break-PASS-CVB.PF stay-INDIR.PST eat-CVB.COND-2.HONOR be-NEG-IND.PRS

(18) 拘束的・義務「(遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。」

Uy. *(keç* *bol-up* *ket-ti)* *biz* ***ket-mi-se-k*** ***bol-ma-ydu.***
late be-CVB.PF go-IND.PST we go-NEG-CVB.COND-1PL become-NEG-IND.PRS

(19) 拘束的・評価的義務「歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ／ものだ。」

Uy. *Yaş* *çoŋiy-ip* *qal-ğan-da,* *bali-niŋ* *gép-i-ni*
year grow-CVB.PF stay-PTCP.PF-LOC child-GEN word-3.POSS-ACC

aŋli-mi-sa ***bol-ma-ydu***
listen-NEG-CVB.COND be-NEG-IND.PRS

次節の (22), (23) にて、現代ウイグル語の「条件形＋なる」が欲求的モダリティを表す場合について詳細を述べる。

3.2.2. 欲求的モダリティ

本節では、「希望」を表す「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」について述べてから、現代ウイグル語の「条件形＋*bol-*「なる」」について述べる。

「希望」(20) には、五言語で「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」という形式が用いられる。ただし、トルクメン語の動名詞は *-As* であり、他の言語の動名詞 Kr., Ka. *-GI,* Uz. *-gi*, Uy. *-GU* とは異なっている。

(20) 欲求的・希望「(お腹が空いたので，私は) 何か食べたい。」

Trk. *Bir* *zat-lar* ***iý-es-im*** ***gel-ýär.***
one thing-PL eat-VN-1SG come-PRS

Kr. *(Ačka* *bol-du-m)* *Bir* *nerse* ***je-gi-m*** ***kel-ip*** ***jat-a-t.***
(お腹が空く なる-PST1-1SG) 一 物 食べる-VN-1SG 来る-CVB 横たわる-PRES-3

Ka. *bir+nȧrse* ***že-gi-m*** ***kel-ip*** ***tur.***
one+thing eat-VN-1SG.POSS come-CVB.SEQ stand

Uz. *Qorn-im* *och-di-ø.* *Shu-ning* *uchun* *nimadir* ***ye-gi-m***
stomach-1SG.POSS empty-PAST-3 that-GEN because something eat-VN-1SG.POSS

kel-yap=ti.
come-PROG=3

Uy. *(Qorsiq-im* *éç-ip)* *birer* *nerse* ***yé-gü-m*** ***kel-di.***
stomach-1SG.POSS feel.hungry-CVB.PF some thing eat-VN-1SG.POSS come-IND.PST

同じ北西語群の言語であるキルギス語とカザフ語で、*kel-ip* に続く動詞が異なっているのも興味深い ((21) でも同様である)。キルギス語では *jat-*「横たわる」、カザフ語では *tur-*「立つ」が用いられている。これらの言語では、副動詞 *-(I)p* に、*jat-/žat-*「横たわる」、*otur-/otïr-*「座る」、*tur-*「立つ」、*jür-/žür-*[13]「歩く」のいずれかが続くことで、持続 (キルギス語; アクマタリエワ 2013) あるいは進行 (カザフ語; Muhamedowa 2015: 170) が表されるという。おそらく文法化の度合いが言語間で異なるのだろう。

三人称主語の希望 (21) では、現代ウイグル語でのみ「動名詞＋*bar*「ある」」が用いられている。他の言語では、(20) と同じく、「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」が用いられている。

(21) 欲求的・希望 3 人称「(あの人は) 街へ行きたがっている。」

Trk. *On-uň* *şäher-e* ***gid-es-i*** ***gel-ýär.***
that-GEN city-DAT go-OPT-3 come-PRS

Kr. *Al* *šaar-ga* ***bar-gï-sï*** ***kel-ip*** ***jat-a-t.***
彼 街-DAT 行く-VN-3 来る-CVB 横たわる-PRES-3

Ka. *Ana* *adam* *qala-ɣa* ***bar-ɣï-sï*** ***kel-ip*** ***tur.***
that person town-DAT go-VN-3.POSS come-CVB.SEQ stand

Uz. *Ana* *u* *odam* *shahar-ga* ***bor-gi-si*** ***kel-yap=ti.***
very that person city-DAT go-VN-3.POSS come-PROG=3

Uy. *U-niŋ* *şeher-ge* ***bar-ğu-si*** ***bar.***
that-GEN city-DAT reach-VN-3.POSS exist

現代ウイグル語でのみ、一人称主語の希望 (20) には「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」が用いられ、三人称主語の希望 (21) には「動名詞＋*bar*「ある」」が用いられている。ただし、Rentzsch (2015: 154) が引用した例に、「動名詞＋*bar*「ある」」が一人称主語の希望に用いられている例がある。したがって、現代ウイグル語では、主語の人称によって、希望を表す形式が使い分けられるわけではないと言える。

現代ウイグル語の「条件形＋なる」は、拘束的モダリティのみならず (前節の (16) から (19) を参照されたい)、欲求的モダリティもカバーする。この形式は、制御不能の 3 人称

[13] それぞれスラッシュの左がキルギス語の語で、右側がカザフ語の語である。

に対する欲求 (22) と懇願 (23) で用いられる。

(22)　欲求的・希望 (制御不能 3 人称)
「明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。」

Uy.	*Ete*	*hawa*	*yaxşi*	***bol-sa***	***bol-atti.***
	tomorrow	weather	good	become-CVB.COND	become-IND.IMPF.PST

(23)　欲求的・懇願「そのペンをちょっと貸していただけませんか？」

Uy.	*U*	*qelem-ni*	*bér-ip*	***tur-si-ŋiz***	***bol-a=m-du?***
	that	pen-ACC	give-CVB.PF	stand-CVB.COND-2.HONOR	be-IND.PRS=Q-3

以上、本節では、一人称主語と三人称主語の希望を表す形式が広く語群を超えて類似していること、現代ウイグル語の「条件形＋*bol-*「なる」」が、拘束的モダリティのみならず、欲求的モダリティも表すことを指摘した。

3.2.3.　認識的モダリティ

本節では、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語 (南東語群) にて、「確信」を表す形式である「動名詞＋*kerak*「必要だ」」と、「疑念」を表す形式である「条件形＋*kerak*「必要だ」」について述べてから、カザフ語と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) にて可能性を表す形式である「動名詞＋*mümkin/mumkin*「可能だ」」について述べる。

(24) の「確信」は、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語では、「動名詞＋*kerak*「必要だ」」が共通して用いられる。ただし、カザフ語・ウズベク語と、キルギス語では、動名詞の前に位置される動詞形態が異なる。カザフ語・ウズベク語では形動詞の過去形が前置され、他方、キルギス語では定動詞の過去形が前置されている。

(24)　認識的・確信
「(朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ。／もう着いたに違いない。」

Kr.	*(Erteŋ menen*	*erte*	*čïk-kan)*	*Emgiče*	***jet-ti***	***bol-uš***	***kerek.***
	(明日	早く	出る-PST2)	すでに	着く-PST1	なる-VN	必要

Ka.	*olar*	***žet-ip***	***kal-gan***	***bol-uw***	***kerek.***
	3PL	reach-CVB.SEQ	remain-PTCP.PAST	be-VN	necessary

Uz. *Ertarab vaqtli uch-ib ket-gan-i uchun ular allaqachon*
morning early fly-CVB leave-PTCP.PAST-3.POSS because 3PL already

yet-ib bor-gan bo'l-ish-i kerak.
reach-CVB go-PTCP.PAST become-VN-3.POSS necessary

(25) の「疑念」は、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語 (南東語群) では、「条件＋*kerak*「必要だ」」で表される。

(25) 認識的・疑念
「彼らがまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」

Kr. *Al emgiče kel-e elek. Mašina-sï* ***buzul-up kal-sa kerek.***
彼 まだ 来る-CVB COP 車-3:POSS 壊れる-CVB 残る-COND 必要

Ka. *olar ȧli kel-me-gen=ø, demek žol-da kölig-i* ***sïn-ïp***
3PL yet come-NEG-PRF=3 in.that way-LOC vehicle-3.POSS break-CVB.SEQ

qal-sa-ø kerek.
remain-COND-3 necessary

Uz. *Ular hali ham kel-ma-yap=ti, balki mashina-lar-i yo'l-da*
3PL yet also come-NEG-PROG=3 perhaps car-PL-3.POSS way-LOC

buz-il-gan bo'l-sa-ø kerak.
break-PASS-PTCP.PAST become-COND-3 necessary

ただし、上記の例では言語ごとに違いがある。*kerek/kerak* の前の動詞に着目すると、キルギス語では *buzul-up kal-sa*、カザフ語では *sïn-ïp qal-sa-ø* と、補助動詞 *kal-/qal-*「残る」が用いられているが、ウズベク語では *buz-il-gan bo'l-sa-ø*、つまり「形動詞＋*bo'l-*」という形式が用いられている。(24) では、カザフ語でも「形動詞＋*bol-*」という形式が用いられている。キルギス語で「形動詞＋*bol-*」が用いられるのかどうかについても調査する必要があろう。

(26) の可能性は、カザフ語 (北西語群) と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) では、「動名詞＋*mümkin/mumkin*「可能だ」」で表される。

(26) 認識性・可能性
「さあ、(昼間だからあの人は家に) いるかもしれないし、いないかもしれない。」

Ka. *tüs* *bol-ɣan-dïq-tan* *ol* *adam* *üy-i-nde* ***bol-uw-ï***
noon be-PTCP.PAST-CNMLZ-ABL that person house-3.POSS-LOC be-VN-3.POSS

mümkin, žoq bol-uw-ï mümkin.
possible no be-VN-3.POSS possible

Uz. *Hozir tushlik vaqt-i bo'l-gan-i uchun, u odam uy-da*
now noon time-3.POSS become-PTCP.PAST-3.POSS for 3SG person home-LOC

bo'l-ish-i ham bo'l-maslig-i ham mumkin.
become-VN-3.POSS also become-NEG.VN-3.POSS also possible.

Uy. *Way taŋ, (kündüz bol-ğan iken u öy-de)*
Ah I.do.not.know noon be-PTCP.PF COP.PTCP.PF that house-LOC

bol-uş-i=mu mumkin, bol-mas-liq-i=mu mumkin.
be-VN-3.POSS=CUM possible be-NEG.PTCP.AOR-NMLZ-3.POSS=CUM possible

以上、本節では、認識的モダリティなモダリティのうち、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語 (南東語群) との間で共通の形式で表される「確信」「疑念」について述べ、カザフ語と南東語群 (ウズベク語・現代ウイグル語) との間で共通の形式で表される「可能性」についても述べた。「確信」「疑念」を表す形式は、4 節にて再度取り上げる。

3.2.4. 証拠性モダリティ

表 4 を見ると、証拠性モダリティのうち、「視覚／聴覚以外の感覚による判断」では、各言語で用いられる形式がそれぞれ異なっていることがわかる。先に挙げた (11) では、キルギス語では *go*、カザフ語では、*siyaqtï*「～ような／～ように」がそれぞれ用いられている。他方、トルクメン語では*-ýa-ň ýaly*「形動詞＋ような」、ウズベク語では、*-ga o'xsha-y=di*「与格＋似る」現代ウイグル語では、*-dek tur-idu.*「ように＋である」という形式がそれぞれ用いられている。これまでのチュルク諸語の証拠性についての研究 (Johanson 2003, 2018) においては、小詞や分析的手段については着目していない。今後は、本節で挙げた要素に注目して分析・考察していく必要がある。

3.3. 補助動詞

表 2 を参照するに、能力可能と状況可能は、語群を超えて補助動詞で表される。

能力可能は、トルクメン語では副動詞*-(I)p* に続いた補助動詞 *bil-*「知る」(7) で表され、他方、北西語群・南東語群では副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-*あるいは *al-*「取る」(27)で表される。現代ウイグル語の *-(y)AlA* は、*-A/-y al-* [-CVB take] が縮約して接辞化したもの[14]である (Ibrahim 1995: 113-114)。

(27) 動的・能力可能
「あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。」

Kr. *Al* *kïtayča* ***oku-y*** ***al-a-t.***
彼 中国語 読む-CVB 取る-PRES-3

Ka. *Ana* *kisi/adam* *qïtayša* ***oqi-y*** ***al-a=dï.***
that person Chinese read-CVB.CNT take-NPST=3

Uz. *{U* */Ana* *u}* *odam* *xitoy* *til-i{-da/-ni}* ***o'qi-y*** ***ol-a=di.***
that very that person china language-3.POSS-LOC/-ACC read-CVB take-NPST=3

Uy. *U* *xenzu-çi-ni* ***oqu-yala-ydu.***
that Chinese-ADVLZ-ACC read-POT-IND.PRS

状況可能も、北西語群・南東語群では副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-*あるいは *al-*「取る」(28) で表される。現代ウイグル語以外の言語では「読むことができない」と表現されているが、現代ウイグル語では、能力可能と同じく、*-A/-y al-* [-CVB take] が縮約して接辞化したもの *-el* を用いて「(何と書いてあるかが) 知ることができない」と表現されている。

(28) 動的・状況可能
「明かりが暗くて、ここに何て書いてあるのか、読めない。」

Kr. *Karaŋgï.* *Ošonduktan,* *emne* *de-p* *jaz-ïl-ïp* *tur-gan-ï-n*
暗い だから 何 言う-CVB 書く-PASS-CVB 立つ-PART-3:POSS-ACC

[14] *-(y)AlA* は接辞であるから、もはや分析的形式ではない。ただし、この形式は、もともとの分析的形式 *-A/-y al-* [-CVB take] が判明しており、その分析的形式が他の言語において可能を表す形式と共通しているため、ここで取り扱うこととする。

oku-y ***al-ba-y-m.***
読む-CVB 取る-NEG-PRES-1SG

Ka. *qaranɣï* *bol-gan-dïq-tan,* *mïna* *žaqta* *ne* *dep* *žaz-ïl-ïp*
dark be-PTCP.PAST-CNMLZ-ABL this good what QT write-PASS-CVB.SEQ

tur-gan-ï-n ***oqi-y*** ***al-ma-y*** ***žatïr=mïn.***[15]
stand-3.POSS-ACC read-CVB.CNT take-NEG-CVB.CNT lying=1SG

Uz. *Chiroq* *juda* *xira.* *Shu-ning* *uchun* *bu* *yer-ga* *nima* *deb*
light very vague that-GEN for this place-DAT what QUOT

yoz-il-gan-i-ni ***o'qi-y*** ***ol-ma-yap=man.***
write-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ACC read-CVB take-NEG-PROG=1SG

Uy. *Bu* *qaraŋğu-da* *néme* *de-p* *yéz-iqliq* *tur-ğin-i-ni*
this darkness-LOC what say-CVB.PF letter-ADJLZ stand-PTCP.PF-3.POSS-ACC

bil-el-mi-di-m.
know-POT-NEG-IND.PST-1SG

今後は、「可能」を表す副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-*あるいは *al-*が、他の形式 (例えば「禁止」を表す *-(I)p bol-* (8)、「可能性」を表す「動名詞＋*mümkin/mumkin*「可能だ」」(26)) とどのような関係にあるのかについて調査する必要がある。Rentzsch (2015) は、ウズベク語とカザフ語において、*-(V)p bol-* は、動作主が明示されない環境にて、話者の外にある可能性を表し (Rentzsch 2015: 94)、他方、<VN + mumkin> は中期チュルク語時代に定着し、話者の外にある可能性 (participant-external possibility) を表す (Rentzsch 2015: 104)、と指摘している。本節で主に取り上げた「可能」を表す副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-* あるいは *al-* は、能力可能も状況可能 (= 話者の外にある可能性) も表せることから、その表す意味が比較的広いことが示唆される。

4. 考察

本節では、本稿での対照から明らかになった分析結果を考察する。まず、語群を超えて

[15] Muhamedowa (2015: 170) では、*-(i)p žatïr* は、発話時の動作の進行を表すという。

見られる共通点について述べ、それから各言語が持つ特徴について述べる。

中央アジアのチュルク諸語全体にみられる共通点としては、「希望」が「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」で表されること ((20), (21)) が挙げられる。ただし、Rentzsch (2015: 155) によれば、この形式の原型はトニュクク碑文 (8 世紀) にて -sVK-POSS *kel-* という形で見られ、未来動名詞 (prospective verbal noun) と**kel-*「来る」から成る構造はチュルク諸語に広く見られるという。したがって、「希望」に「動名詞＋*kel-/gel-*「来る」」を用いることは、中央アジアのチュルク諸語だけに見られる特徴ではないと言える。

一部の語群が共有する共通点について述べる。3.2 節の表 4 と 3.3 節から、北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語の類似点が、同南東語群のウズベク語とウイグル語の類似点よりも多いことが指摘できる。北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語においては、次のような共通点が指摘できる: 拘束的モダリティでは、「許可」を「条件＋*bol-/boʻl-*「なる」」(13) が表し、「義務」「評価的義務」を「動名詞＋*kerak*「必要だ」」(14) が表すこと、認識的モダリティでは、「確信」を「動名詞＋*kerak*「必要だ」」(24) が表し、「疑念」を「条件＋*kerak*「必要だ」」(25) が表すこと、動的モダリティでは「可能」を副動詞 *-A/-y* に続いた *ol-*あるいは *al-*「取る」((27), (28)) が表すこと。

Schönig (1999: 85) は、歴史的な民族移動の観点から、ウズベク語が北西語群と南東語群との間に位置する特徴を持つのは、北西語群の言語から「混成」北西・南東語群の言語への発展の結果である (The transitional position of Uzbek between Kipchak and South East Turkic results from a development from a Kipchak language to a "mixed" Kipchak-South East Turkic one) と主張している。したがって、Schönig (1999) はウズベク語の基層が北西語群の言語にあると考えているように判断できるが、筆者は、ウズベク語の歴史的な出自と発展について、今すぐに結論は出せない。庄垣内 (2002: 27) も、ウズベク語の成立過程はよくわかっていないと述べている。まずは、深い関係にあると考えられる北西語群の言語 (キルギス語・カザフ語) と南東語群の言語 (ウズベク語・現代ウイグル語) の共時態を全ての観点から徹底的に比較対照することが必要であろう。

次に、各言語が持つ特徴について述べる。トルクメン語は中央アジアのチュルク語のうちで独特な特徴を持つと言える。例えば、義務形の *-mAlI* (拘束的・義務 (3) , 拘束的・評価的義務 (4), 認識的・疑念 (5)) を持つことが挙げられる。この形態素はトルコ語 (南西語群) にも同音形のものが見られるがそれとは異なり、3.1 節で前述したように、それ自体に何も付かずに用いられるか、アスペクトやムードを表す接辞で屈折した *bol-* を後続させることで用いられる。また、副動詞 *-(I)p* ＋補助動詞 *bil-*「知る」(許可 (6), 能力可能 (7)) と、副動詞 *-(I)p*＋補助動詞 *bol-*「なる」 (禁止 (8)) が用いられる。前者の *-(I)p bil-*は他の語群には見られず、後者の *-(I)p bol-* も禁止を表すために用いられることはないようである。Rentzsch (2015: 94) によれば、カザフ語とウズベク語では、非人称主語の (不) 可能を表す

周辺的なマーカーとして機能している。

キルギス語について二点指摘する。一つは、小詞 *go* である。これは、証拠性・視覚／聴覚以外の感覚による判断を表す手段 (11) として用いられているが、証拠性の標識とされる *eken* (12) との違いは何であろうか。これは、3.1 節でアクマタリエワ (2011: 207) の説明 (*go* は推測を表し、*eken* は伝聞を表す) を引用したが、これらが付く事態を話し手自身が判断しているかどうかに関わる可能性がある。今後調査する必要があろう。もう一つは、定動詞の後、つまり文が閉じた後にモダリティ要素が後置されることがある。この例は *eken* (証拠性・伝聞 (12)) と *bol-uš kerek* (認識的・確信 (24)) が用いられている例に見られる。これは、同語群のカザフ語とも異なる特徴であり、キルギス語内部で他の文法現象と連動していないかを調べる必要があろう。

最後に、現代ウイグル語 (南東語群) の「条件形＋*bol-*「なる」」について述べる。北西語群 (キルギス語・カザフ語) とウズベク語 (南東語群) では、この形式は許可にのみ用いられるが、現代ウイグル語では、許可 (13) (= (16)) のみならず、禁止 (17)、義務 (18)、評価的義務 (19)、希望 (22)、懇願 (23) で用いられる。

以上の考察をまとめると、トルクメン語 (南西語群) と現代ウイグル語 (南東語群) がそれぞれ他の語群の言語には見られない独自のふるまいを見せる一方で、キルギス語・カザフ語 (北西語群) とウズベク語 (南東語群) には、類似したふるまいが比較的多いことが指摘できる。つまり、本稿で行ったモダリティ形式の比較・対照の結果、従来の系統分類とはずれが生じていることが明らかとなった。今後はこのずれが見られる原因についても考察していく必要がある。

謝辞

本研究は、日本学術振興会 科研費 JP22J01538 の助成を受けている。

本稿は、言語学フェス 2023 (2023/1/28 (土)、oVice によるオンライン開催) で行われたポスター発表の内容を大幅に加筆・修正したものである。言語学フェスで聴衆として参加してくださった方々・コメントをしてくださった方々、本稿の調査にご協力いただいたインフォーマントの方々、出版前の現代ウイグル語のデータの引用を快諾してくださった風間伸次郎氏・新田志穂氏、カザフ語の翻字方法について助言をくださった大野秀治氏、本稿にコメントをくださった菱山湧人氏、各位に深く感謝申し上げる。ただし、本稿における誤りがあった場合、その誤りは全て筆者に帰するものである。

略号一覧

ABL	ablative	CVB	converb	OBLG	obligative	PROG	progressive
ACC	accusative	DAT	dative	OPT	optative	PRS	present
ADJLZ	adjectivizer	GEN	genitive	PART	participle	PST	past
ADVLZ	adverbalizer	HONOR	honorific	PASS	passive	PST1	確定過去
AOR	aorist	IMPF	imperfective	PAST	past	PST2	不明過去
ASSERT	assertion	IND	indicative	PF	perfect	PTCP	participle
CNMLZ	clause nominalization	INDIR	indirective	PFV	perfective	Q	question marker
		LOC	locative	PL	plural	QT	quotative
CNT	continuative	MOD	modality	POSS	possessive	QUOT	quotative
COND	conditional	NEG	negative	POT	potential	SEQ	sequential
COP	copula	NMLZ	nominalization	PRES	present	SG	singular
CUM	cumulative	NPST	non-past	PRF	perfect	VN	verbal noun

参考文献

アクマタリエワ、ジャクシルク (2011)「キルギス語—データ :「モダリティ」」『語学研究所論集』16: 203‑9.

アクマタリエワ、ジャクシルク (2013)「キルギス語の「持続」を表す補助動詞: jat-、tur-、otur-、jür を中心に」東京外国語大学博士論文.

Christopher, Nadezda (2020) Kazakh Particle *ǧoj* as an Existential Operator. Modicom, Pierre-Yves and Olivier Duplâtre (eds.) *Information-Structural Perspectives on Discourse Particles.* Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Clark, Larry (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.

日髙晋介 (2013)「ウズベク語 : 補遺データ (受動表現, ヴォイスとその周辺, モダリティ) (データ)」『語学研究所論集』18: 467–85.

Ibrahim, Ablahat (1995) *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.

Johanson, Lars (1998) Structure of Turkic. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. 30-63. London, New York: Routledge.

Johanson, Lars (2003) Evidentiality in Turkic. Aikhenvald, Alexandra Y. and R.M.W. Dixon (eds.) *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Johanson, Lars (2018) Turkic Indirectivity. Aikhenvald, Alexandra Y. (ed) *The Oxford Handbook of Evidentiality*. 509‑24. Oxford: Oxford University Press

Johanson, Lars (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kirchner, Mark. (1998) Kirghiz. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*. London and New York: Routledge. 344-356.

風間伸次郎 (2011)「まえがき―テーマ企画: 特集「モダリティ」」『語学研究所論集』16: 29–55.

風間伸次郎 (2022) 「トルクメン語：特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」」『語学研究所論集』26: 439‑99.

風間伸次郎・アクマタリエワ、ジャクシルク (2022)「キルギス語：特集補遺データ「受動表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」」『語学研究所論集』26: 649–697.

風間伸次郎・日髙晋介 (2022)「ウズベク語：特集補遺データ「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」」『語学研究所論集』26: 699–732.

Muhamedowa, Raihan (2016) *Kazakh: A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.

奥真裕 (2020)「トルコ語の否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』24: 195–200.

Rentzsch, Julian (2015) *Modality in the Turkic languages: form and meaning from a historical and comparative perspective*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.

Samojlovič, A. N. (1922) *Nekotorye dopolnenija k klassifikacii tureckih jazykov.* Petrograd: Rossijskaja Gosudarstvennaja Akademičeskaja Tipografija.

Schönig, Claus (1997) A New Attempt to Classify the Turkic Languages (2). *Turkic Languages* 1: 262–77.

Schönig, Claus (1999) The Internal Division of Modern Turkic and Its Historical Implications. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. 52: 63–95.

庄垣内正弘 (2002)「中央ユーラシアの言語接触-チュルク語の場合 (特集 言語接触と言語の変容)」『EX ORIENTE (えくす・おりえんて)』6: 1–50.

宇山智彦編 (2010) 『エリア・スタディーズ 26 中央アジアを知るための 60 章【第二版】』東京: 明石書店.

参照ウェブページ

Ethnologue: Languages of the World. (https://www.ethnologue.com/)［最終閲覧日: 2023/2/2］